

パフォーミングアーツ・ウェーブ

2. 劇場共同製作ダンス公演 BATIK 新作『おたる鳥をよぶ準備』

* 愛知芸術文化センター開館 20 周年記念

日 時：2012年10月31日（水）、11月1日（木） 両日とも18時30分開演

場 所：愛知県芸術劇場小ホール

スタッフ・出演者：

構成・演出・振付：黒田育世

出演：BATIK、音楽・絵：松本じろ

国内でも有数のダンス事業の発信拠点劇場である伊丹市のアイホール、静岡市の SPAC とともに、女性だけのダンスカンパニーBATIK による新作を共同製作し、公演を行った。

黒田育世が率いるダンスカンパニーBATIK は、2012 年に結成 10 年目を迎えた。ひたすら踊り、創作を続けてきたカンパニーの一つの節目に黒田が、今回取り組んだのは、本人が「死ぬ準備」だと話していた新作『おたる鳥をよぶ準備』である。「私が死んだ時に、世界のどこかで、同じように誰かが踊っていることを思い出して、喜んでほしい。」これまでに出会った大切な人たち、その土地、そこで生まれた文化、そして踊り。その全てを体に引き受け、新たに出会う準備を始めたという作品。黒田が始めた“死ぬための手引き”は、生きて出会うことの賛歌でもあった。

BATIK の初めての愛知公演であったが、前年に黒田育世の出演する作品を上演したり、ワークショップを行うことで、黒田の名前を告知してきたこともあって、セット券などの売り上げは好評であった。ただ Noism 公演や、「金の文化祭」公演と、3つの小ホール公演が続いたこと、Noism が3回目の公演で大変好調な売れ行きであったことなどの理由により、公演直前でのチケット売上げが意外に伸びなかった。

作品は3時間に亘り執拗に繰り返される動きや音楽に、初めての観客はとまどっていた方も多かったが、一方で全身全霊をかけて踊るダンサーたちに、感動していた観客も多かった。最後の場面ではフォーラムⅡ（地下2階の公共空間）に場所を移動して、黒田がソロダンスを踊って長時間の生命のパフォーマンスを締めくくった。



撮影：羽鳥直志